

教育課題の共有から生徒の変容と教職員の協働を促進する学校改善

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
福田 恵

実習責任教員 久 我 直 人
実習指導教員 泰 山 裕

キーワード: 協働, 組織化, 学校改善, 教育課題

I 課題分析

1. 課題設定の理由

(1) 置籍校の概要

生徒数 184 名、学級数 8 学級（各学年 2、特別支援 2）、教職員数 23 名の小規模校である。生徒は明るく素直で、落ち着いた学習・生活環境のもと、行事や部活動にも熱心に取り組んでいる。

(2) 置籍校の課題把握

生徒・教職員対象アンケートを中心に、生徒・教職員の課題を把握し分類した（表 1）。

表 1 置籍校の課題の整理

生徒が抱える教育課題	適応できずに埋もれている生徒の存在 主体性・目的意識の脆弱さ 低い他者への信頼 問題解決への消極的な姿勢
教職員の教育活動に関する課題	教師主導の統制的な指導 生徒への信頼と勇気づけ 教師間ギャップ
教職員の組織上の課題	個業化 同僚性の弱さ

(3) 実践研究の目的と課題

生徒の内面的な教育課題と教師の指導の質的課題、組織上の課題という 3 つの課題を一つのこととし、生徒が抱える教育課題解決に向けた組織的取組（協働）を通して、生徒の変容と教師の指導の質的改善、教職員の組織化を同時に実現することを本実践研究の目的とした。また、実践研究の目的達成のための課題として次の 4 つを設定した。

- ①置籍校の教育課題の可視化
- ②組織化と教育改善を実現する教育改善プログラムの構築
- ③構築したプログラムの展開による組織化と教育改善に向けた実践
- ④プログラムの効果性の検証

2. 実践研究の枠組み

(1) 置籍校の教育課題に適合した教育改善プログラムの策定

置籍校の生徒が抱える教育課題の解決のために、「生徒の意識と行動の構造に適合した教育改善プログラム」（久我 2014）を参考に、①自分のよさを生かした夢づくり、②自分を高める学びづくり、③人のことを大切に生活づくり、④全員参加の自治的な活動づくり、の 4 つを具体的な手立ての柱とした。また、これらの基底となる「自分への信頼」を支える手立てとして、⑤多面的な勇気づけと信頼づくり（「ボイスシャワー、ポジティブフォーカス（久我 2014）」）による、勇気づけの取組を設定した（図 1）。

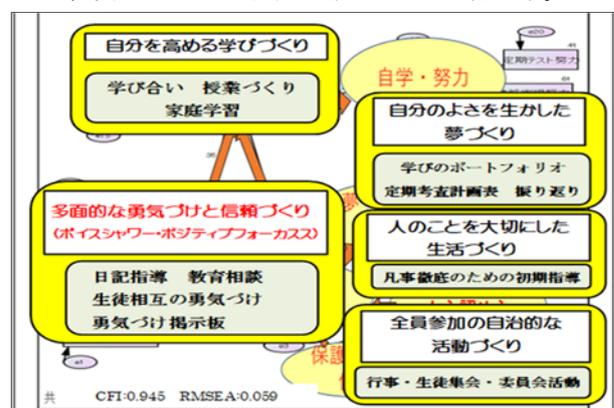


図 1 課題解決に向けた具体的取組

(2) 教育改善を実現するための教師の組織化を促す学校組織マネジメントの枠組み

置籍校の教育課題解決のために、「教師の主体的統合モデル」(久我 2011)を参考に、実践研究の基本的な枠組みを作成した(図2)

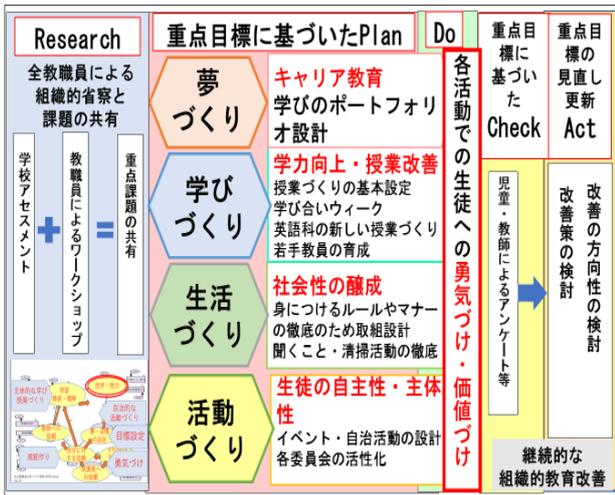


図2 実践研究の基本的な枠組み

II 課題解決

1. 実践研究の実施

(1) Research 期

2016年12月の校内研修において、本学の久我教授の講演(「潤いのある学校づくり」)と、筆者のプレゼンテーションをもとに、置籍校の学校アセスメントデータの提示、教育課題の焦点化と効果のある指導についての話し合いをワークショップ型研修として行った。その結果、自校の教育課題が可視化、共有された(図3)。

	よさ	課題	改善点やアイデア
学習	宿題の提出率 朝読の態度 テストを大切に受ける	学習への主体性 わかったふり 自主勉ノートの内容 コミュニケーション能力 深い思考 学力差	夢・目標の設定 ポートフォリオの作成 授業改善 教師間のコミュニケーション
生活	あいさつ 礼儀 思いやり 優しさ 助け合い 聞く態度	主体性 チャイム着席 清掃の仕方 悪口 いい訳 他人を傷つける言葉 体力不足	ノーチャイム 清掃活動の見直し 人権・道徳教育の充実 集団訓練 家庭訪問 家庭連絡
特活自治	行事に意欲的取組 生徒主体の生徒会	主体性 活動のマニュアル化 委員会活動のマナー 役割の認識不足化	委員会活動の活性化 あいさつ運動 具体的な活動 成果発表

図3 ワークショップで出た意見の集約

(2) Plan 期

可視化された教育課題の解決をめざし、教職員の組織力と協働の意識を高めるための取組を次のように設計し、共有した。①課題解決のためのプロジェクト設計、②組織的な意思形成の促進(管理職・教務等との打ち合わせ、教育改善の組織的展開イメージ(図4)の作成、学校経営書による教育課題の共有、新年度企画委員会)。共有した取組構想は、年度当初に開かれた各種会議において各担当が提案、報告をし、その場で検討、最終確認を行った。このようにして、組織的意思決定がなされた。

置籍校中学校プロジェクトの展開計画(イメージ・案)													
1~1月	2~3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
11~12月 生徒教師アンケート	夢 学びのポートフォリオ設計 実践計画作成	自分のよさ確認	学びのポートフォリオ	学びのアクションプラン	定期テスト計画表								
職員研修 ワークショップ 重点課題の共有	学び 授業づくり計画 設計・校内研修 の活性化	学び方指導	主体的・対話的深い学びの充実 家庭学習の充実	人権・道徳教育の充実 校内研修の活性化	研修の振り返り								
	活動 イベント・自治活動の計画	初期指導	丁寧な学習を身に付けよう	行事を成功させよう	検定・資格取得に挑戦しよう	今年度の振り返り 来年度の目標設定							
	生活 マナーの整理・取組計画 清掃活動の徹底	初期指導	勇気づけ・ポジティブフォカス										
	行事等 (平成29年度)	修学旅行 遠足 行事	中間テスト 法行式	修学旅行 遠足 行事	修学旅行 遠足 行事	修学旅行 遠足 行事	修学旅行 遠足 行事	修学旅行 遠足 行事	修学旅行 遠足 行事	修学旅行 遠足 行事	修学旅行 遠足 行事	修学旅行 遠足 行事	修学旅行 遠足 行事
	置籍校の 設計ステージ	基本の 徹底	全力投球	イベント	絆づくり	達成への努力	振り返り・目標設定						

図4 教育改善の組織的展開イメージ

(3) Do 期

1) 自分のよさを生かした夢づくり

○My 夢&キャリアシート

目的意識の醸成を図る方策として、My 夢&キャリアシートを導入した。生徒が自分のよさや将来の夢、がんばったことについて、自分と向き合う時間となった(図5)。

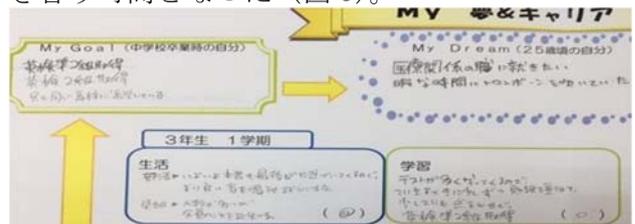


図5 自分のよさや目標、努力の跡を記入

2) 自分を高める学びづくり

○夢実現のための家庭学習の充実

夢の実現に向けて主体的に自分を高める努力として自主勉ノートで家庭学習の充実を行った。ノートが終了するごとに校長室へ行き、校長から勇気づけをされた生徒は、

「一冊一冊丁寧に仕上げたい。」と次のノートづくりに意欲を高めていた(図6)。



図6 校長室へ

○テスト前勉強大作戦シート

テスト前に学習計画を立て記録し、その達成度をふり返ることで、生徒は自分に合わせた計画的な学習への取組を考えた。

3) 人のことを大切に生活づくり

○社会で通用するマナーを学ぶ初期指導と継続的な実践

全校集会等で、学校生活のルールやマナーは社会生活を送るうえで重要であること、自分や他の人たちを大切にするために、人の目を見て話をきちんと聞くことの指導を継続的に行った(図7)。



生徒の話聞く態度は外来者

から賞賛されることも多かった。図7 初期指導

4) 全員参加の自治的な活動づくり

○委員会活動強化月間の取組

委員会活動の活性化をめざして、各委員会が各ステージに合わせた活動強化月間に取り組み、年間を通してストーリー性のある活動が行われた(図8)。



図8 保健給食委員会

○生徒会ワークショップ

2017年8月下旬、生徒会役員でワークショップ(図9)を行い、生徒同士が声をかけ合う「温かいあいさつ



図9 ワークショップ

運動」「もくもく清掃活動」を実施した。

5) 多面的な勇気づけと信頼づくり

○勇気づけ掲示板と道徳・人権授業の充実

生徒の学習や生活の様子・成果を、各ステージに合わせ、ボランティア部が勇気づけ掲示板に掲示した。生徒から生徒への応援メッセージや行事・授業風景に多くの生徒が足を止めて見入り、生徒同士で喜び合う姿が見られた(図10)。

また、道徳・人権の授業では生徒同士が意見を伝えやすいように、教師から生徒へ、生徒相互の勇気づけが行われ、認め合い支え合おうとする生徒の意見が多数聞かれた(図11)。



図10 勇気づけ掲示板



図11 自分の本音を語る

6) 組織化の促進・活性化のための支援

○「エバーグリーン通信」の発行

各活動における目標、生徒の様子や成果を共有し、意思統一を図る手立てとして、教職員向けに「エバーグリーン通信」を発行した。

○「フラッと勉強会」(自主勉強会)の実施

若手教師を中心に、自主勉強会を実施した。若手教員の困り感や抱え込み感を軽減するベテラン教員からのアドバイスに



図12 自主勉強会

若手は「尊敬できる先輩なので素直に聞けます。」と語った。(図12)。

2 実践研究の総括

(1) 生徒の変容

目的意識の醸成、教師信頼、生徒相互の信頼が読み取れると同時に、課題となっていた「クラスの人は友達にいやなことを言うことがある」

という反転項目において、他者に対する言葉の攻撃性が弱められ、クラス効力感の向上が確認された。また、規範意識の向上、自治力の向上も確認された（図13）。

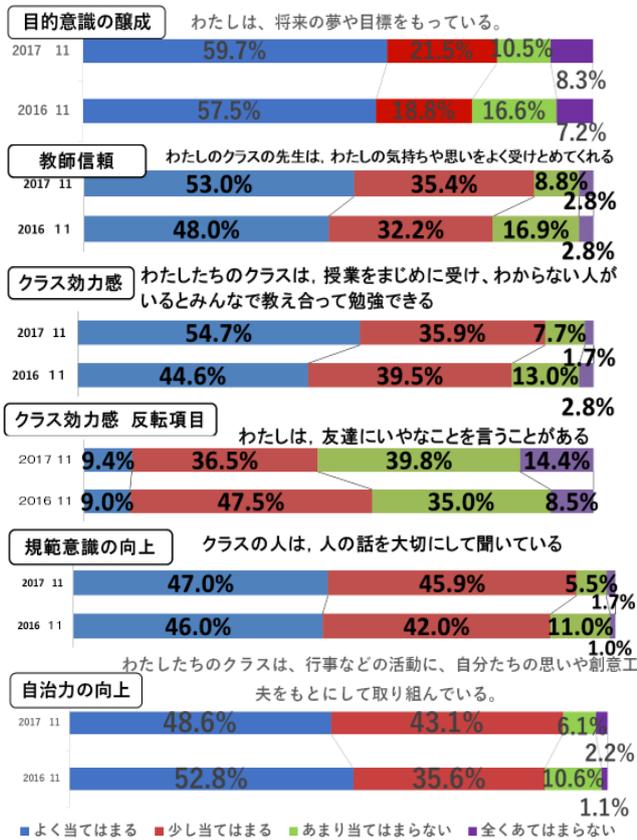


図13 生徒の変容（生徒アンケート結果より）

（2）教師・組織の変容

組織的省察による教育課題や重点目標、具体的な取組の共有を通して、生徒一人一人のよさを生かす勇気づけを行うなど、統制型の指導から生徒に寄り添い型の指導への転換が見られた。また、学び合いウィークなどを通して、指導法の見直しや授業改善に取り組んだ。学び合いや重点目標の共有が、教師間の信頼関係の構築を促進し、同僚性と協働性が向上したことが読み取れた（図14）。

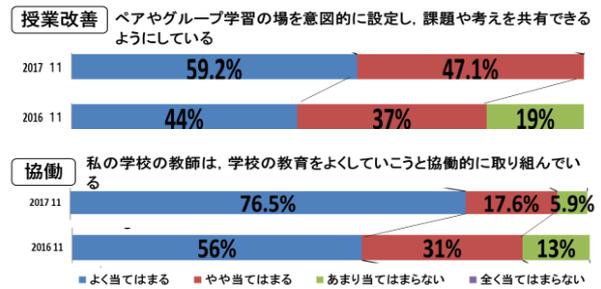


図14 教師・組織の変容（教職員アンケート結果より）

（3）実践研究の成果

本実践研究の成果を次の8点とした。①生徒相互、生徒から教師への信頼関係の構築。②生徒相互、生徒と教師間の信頼関係構築によるクラス効力感の向上。③夢や目標の設定による目的意識の向上④規範意識の向上⑤自治力の向上⑥教師主導の統制的な指導から生徒への寄り添い型の指導への転換。⑦授業づくりに対する意識、実践の在り方の変容。⑧教職員相互の信頼関係の向上による同僚性の高まりと協働の促進。

これらのことから、生徒が抱える教育課題を可視化し、教育課題の解決に向けて、生徒の変容と教師の指導の質的改善、教職員の組織化を実現するという実践研究の目的は一定程度達成されたと推察された。

（4）今後の課題と展開の可能性

今回、被受容感や自己肯定感については強い肯定回答とともに、否定層の増加が確認された。これは、道徳・人権授業で自己の内面を見つめ、生徒の自己認識が深まり、自分に対する信頼が一旦停滞した現象であると捉えられた。しかし、依然として学校生活に適応しにくい生徒が存在するため、さらなる勇気づけや価値づけを行い、自尊感情を高められるよう心に寄り添った個別指導の充実を図る必要がある。また、他校への汎用可能なモデルとして、本実践研究の取組を精緻化していくことが、今後の課題であり、展開の可能性と考える。